

# 【ねがいましては】

第62号

平成6年2月25日  
共和珠算学習塾

## 「見えないハンデ」

私が小学生のころ、5・6年生でしたか、その頃よく母に「ツンボ」「ツンボ」と言われて、本当に自分は耳の聞こえが悪いのではないかと悩みました。そして毎年春行われる、学校の集団検診の聴力テストの時、それはもうドキドキしながら機械を耳に当てたことを思い出します。(ひょっとしたらぼくは、耳が悪くて病院に行かせられるかもしれない・・・)

その時です。検査の先生がとんでもないことを言いだしたのです。「君、いい耳しているねー」私は耳のかたちのことだと思ったのです。しかしその思いは見事に間違いで、「よく聞こえる耳だね」だったのです。

私はビックリしました。「ちょっと〇〇先生来てください。この子、すごい耳の持ち主なんです。いいですか?」と、言いながらもう一度聴力テストをしたのです。私はかすかな音を聞くや否や手を举げます。「はー、本当だ。こりやすごい!」

実は、ツンボだとバレることが怖くて、その機会を耳におもいきり強く当てていたのです。

「聞き逃してなるものか・・・」それが良かったようです。

その日の私がうれしい1日であったことは言うまでもありません。

このことに似た現象は今の子どもたちの中にも違った形で様々に現れています。一番多いのが、いつも「あなたはドジね」とか「バカね」とか「忘れっぽいわね」とか「できない子ね」のように、頭が悪いように言われ続けている子は、学校から成績をもらってそれが裏付けされると、完全にもう「そうだ、そうにちがいない」と思い込んでしまいます。「自分はバカだ現象」です。

その子はその日から、外からは見えないハンデをしょって生きてゆきます。正確にもりますが、比較的内気な子は、余計にその域にはまり込んでしまいます。外面的に明るく見える子でも、内心では悩んでいる子も多く見受けられます。私の授業の中でも、説明を聞いているうちから「どうしよう、ぼくにはわかるはずがない。なぜならバカだから、ここでもぼくははじをかくんだ」とひやひやしています。この時点で心は半分以上、私の言葉から離れてはいますが、説明が終わったらあとわかっているはずがありません。そしてそのあと、「あー、やっぱりぼくはバカだった」と、落ち着くのです。

このことは体育や音楽などでも同じです。体育の時間に「私には飛び箱なんか跳べるはずがない。だって運動神経がないって、いつもお母さんにいわれているもの」と、心にハンデを作ってしまっているからです。そして体が委縮し「やっぱり跳べない」ということになります。

そろばんでも、一緒に入ってきてだんだん差がついてきて、元気がなくなってくる子がいます。そんな子を見ると私は心の中で「オイ! 元気、元気出せ、うまくいかなくても、何度も何度もこつこつやればじょうずになるぞ」と、つぶやきます。そしてそんな子に多く見られるのは、とても「優しい」ということです。というわけで、世のお母さま方、うちの子は出来が悪いとお思いでしたら、それはきっとそのお子さんは「優しい子」です。

## ☆3月の予定

5日(土) 珠算・暗算検定申し込み締め切り

19日(土) 珠算4級以下・暗算1級以下検定試験・・・共和珠算塾

20日(日) 珠算3級以上・暗算段位検定試験・・・中央商業高校

○春休みの計画は後日お知らせします